

何よりも私自身が、人間としての弱さの故に、自分への驕り、安易に人を評価してしまう、という誘惑に直面することが多々ありました。しかし、たとえそれが学問における冷静な批評を必要とする場合であっても、真理の前に立つ謙遜さを見失った上での行為なら、やがては自分のプライドを死守することに囚われ、ついには勝ち負けの世界に埋没して行くことになりはしないか。そこからは、妬みや憎しみといった非創造的（自己破滅的）な負のエネルギーが流れ出てくるだけではなかろうか、と考えてしまいます。

しかし、このように負のエネルギーが流れ出るままに身を任せるのではなく、創造のエネルギーを生み出して行くために絶えず研鑽を重ねる姿勢はどのようにして生みだして行けばよいのか。この問いへのヒントを、私は冒頭に引用したパスカルの言葉と、コヘレトの言葉の中に見出すのです。それは、真理の前に立つ謙虚さのことなのではないかと。

とはいえ、やっと到達したと思った時点で、さらにその先にまだ道は続いている、という現実には人は気づかされる。つまり、理性の限界を気づかされるのです。パスカルはこの現実を「人間の中間性」と呼びました。正に我々は虚無と無限の中間におかれている。それゆえ「中間をはずれることは人間性をはずれることである」(378)とさえ語りました。のみならず、こうした中間性を自覚できることが人間の「偉大さ」なのだ、とも語りました。

そんな現実の中に生かされている我々に、「神は永遠を思う心を与えて下さった」とコヘレトは語ります。この永遠とは、移ろい行く有限存在の世界に属するものではなく、不変、かつ無限なるもの、つまり、神ご自身の属性です。

それゆえ我々は、傲慢さにも自己卑下の念にも囚われずに、神を思いつつ創造のエネルギーが生み出される希望を抱きながら日々の研鑽を進めて行く力に満たされるのではないだろうか、と考えさせられているところなのです。

【クリスマス・コンサート】2017年12月19日（火）10時40分

次回の大学礼拝はクリスマス・コンサートとして行います。指揮者に北海道農民管弦楽団代表の牧野時夫さん（有機農園「えこふあーむ」代表）をお迎えし、吹奏楽団、室内楽団、合唱団、聖歌隊による演奏や合唱を聴き、出席者一同でクリスマスの讃美歌とヘンデルの「ハレルヤ」（「メサイア」より）を歌います。クリスマスの奨励はキリスト教学の高橋優子先生が担当なさいます。

【クリスマス・コンサートの練習】

本日18時から吹奏楽団部室で合同練習を行います。また、前日リハーサル（12月18日（月）18時）と当日リハーサル（12月19日（火）9時）は黒澤記念講堂で行います。聖歌隊に参加する学生・教職員を募集しています。

【前回の大学礼拝】2017年12月5日

学生218名 教職員ほか11名 合計229名

【11月28日の出席人数の訂正】学生272名 教職員ほか31名 合計303名

【大学礼拝週報】 2017年度 第27号（後学期第12号）

2017年12月12日（火）午前10時40分

酪農学園大学 黒澤記念講堂

《大学礼拝》

司 式 小林昭博（キリスト教学教員）
奏 楽 佐藤理恵（野幌教会会員）
讃美指導 相原晴伴（循環農学類教員）

前 奏 「高きにいます神にのみ栄光あれ」（アーベル作曲）
讃美歌 讃美歌 21 259 番（いそぎ来たれ、主にある民）
聖書 コヘレトの言葉 3 章 11 節

祈 り
さんび 酪農学園大学聖歌隊
奨 励 「理性の限界と永遠を思う心」 小栗昭夫
（日本基督教団小樽聖十字教会牧師、元本学講師）

報 告
讃美歌 讃美歌 21 267 番（ああベツレヘムよ）
後 奏 「いざ来ませ、異邦人の救い主よ」（アーベル作曲）

【本日の聖書】コヘレトの言葉 3 章 11 節

11 神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終わりまで見極めることは許されていない。

【奨励者からのメッセージ】「理性の限界と永遠を思う心」

「理性の最後の一步は、自分を超越するものが無限にあることを認めることである。もしそれを認めるに至らないなら理性は弱いものにすぎない」。私は、20歳の頃にこの言葉と出会いました。それ以来、50年間にわたり私にとって、生きる全ての場において自分の考えと行動を律することばとなっています。

きょうは、このパスカルの言葉と、旧約聖書コヘレトの言葉を土台として、「理性の限界」と「永遠を思う心」についてお話をさせて頂きたいと思います。

私の人生は、第二次世界大戦終了の年に始まり、戦後の歴史と同じ歩調で歩んで来た日々でありました。しかし、これら72年の日々は、誰もが謙遜になり、いのちへの尊厳に目を向け、平和な新しい日本を作りだすことに邁進してきたどころか、誰もがエゴイスティックな争いと混乱の中に埋没して来た歴史であったとしか思えません。